

東北地方の霊山と修験・神社[†]

—シンポジウムより—

講 師：宮家 準*
コメンテーター：梅屋 潔**
塚本 信也***
司 会：久慈 利武****

Sacred Mountains, Shugendo and Shrines in Tohoku District: symposium

Hitoshi MIYAKE
Kiyoshi UMEYA
Shinya Tsukamoto
Toshitake KUJI



[†] 本稿は、平成17年11月10日に行なわれた講演会後半のシンポジウムをもとにした（於本学土樋キャンパス90周年記念ホール）。

* 慶應義塾大学名誉教授、國學院大学講師、日本山岳修験学会会長、日本民俗学会理事

** 東北学院大学教養学部助教授

*** 東北学院大学教養学部助教授

**** 東北学院大学教養学部教授

司会：先ほどは「東北地方の霊山と修験・神社」と題して、宮家先生に基調講演をいただきました。先生、有難うございました。

後半では、コメンテーターの先生方に加わっていただき、先ほどの基調講演に関するコメントなどをしていただきながら話をすすめたいと思います。申し遅れましたが、私、人間情報学研究所の主事を務めております久慈と申します。よろしくお願いたします。

では、梅屋先生からどうぞ。

梅屋：本日は、約10年ぶりに先生の重厚なお話を聞くことができ、ますます堅実で精力的なご研究をされていることに、いつものことながら大変感銘を受けました。一応、宗教を対象に文化人類学、民俗学、また宗教学を専攻しているところからコメンテーターの席についてはいますが、修験の第一人者の先生にコメントする能力は私にはないと思われ、またフロアのほうにも東北のこの分野での専門家が何人もおみえであるとお聞きしておりますので、私の立場から、質問の形でお伺いしたいと思います。

先生には、東北の霊山と修験・神社という形で地域に合わせた講演をしていただいたわけですが、この本学の土樋キャンパスでこのようなお話を伺うのは、非常にふさわしいことなのです。といいますのも、このあたりにはかつて修験が活躍した痕跡が色濃く認められるからです。

例えば、本学中央図書館のはす向かいに田町大日堂という祠がありまして、その祭礼の時に80歳過ぎの氏子の方に伺ったところでは、昔は山伏がほら貝を吹きながらお祭りを取り仕切っていたというお話でした。しかも、その祠の縁起として「大同年間（806-810）会津若松の東山に温泉が発見された時に真降寺を開いたが

その後荒廃したために、その本尊があちこちふさわしい場所を巡った挙句に慶安2年（1649）当地にたどり着いた」というのがあります。さらに「1716年から1750年までは天台宗光円寺の末院があったけれども、その後真護山興降院宗海別当、京都の真言宗醍醐三寶院末となり文殊院と改める。明治初年里見明光住職を最後に寺としては廃止された（要約）」というような縁起が祠の中に収められておりました。

そして、そこから広瀬川の方角を猿曳丁といったようですが、これにもその祠の中に次のような由来がございました。「磐城の国信夫郡にあり、山王権現彌宜上村右近の孫新兵衛、政宗公に従う。猿を好む。慶長6年（1601）、山王社、政宗公の命にて遷し、以来当地は猿曳丁と呼ばれる。維新後日吉神社となり、明治41年（1908）愛宕神社に合祀される（要約）」ここで話題に上った愛宕神社ですが、ご存知のように伊達政宗と一緒に米沢から参りました愛宕神社が広瀬川を越えたすぐのところであり、そこには日本最大という烏天狗の坐像がありまして、私が知る限りでは、十二神と稲荷が末社として祀られています。また、大通りを隔てた荒町には毘沙門天がありまして六軒町には秋葉山、柳町にも大日、鍛冶町には荒神がごさいます。

このように修験の活動の痕跡があちこちに認められて、恐らくこの藩だけではないと思うのですが、東北各地で、日本各地で大切にされていたものが、お話の時代設定の近世からは外れてしまいますけれども、明治初年の神仏分離令と官の主導ではなかったにしろ廃仏毀釈と、さらに明治5年（1872）の修験道廃止令でかなりの打撃を受けたことは周知の通りです。先生は膨大な著書をお持ちなのでどこかで詳しくお書

きになっているかもしれませんが、せっかくの機会ですので、どうして修験がそのように徹底的な排除の対象になったのか、という点をお伺いしたいと思います。

宮家：先ほども申し上げました通り、修験の崇拜対象は権現とよばれています。羽黒権現、熊野権現というように。権現という神の起こりを考えて見ますと、日本には神様は姿を現さないものなんだという思想がありまして、神社にはご神体はつくらないのが本来ですから、そういったような姿をみせない神様を実際に現して実在しているように示す、それが権現という語で表現されている。それと同時に、もうひとつは修験の場合ですと権現を祀ると同時に、あたりをしずめる神様或いはまた病気を治す神様、そういうものに崇めます。さきほど牛頭天王が非常に多いと申し上げましたけれども、牛頭天王の信仰というのも修験が広めたものです。明治政府の大きな政策はご承知のように国学思想にもとづいて神と仏を区別するという、これが一番非常に基本的なことですね。ところが、日本人の信仰を見てみますと、「神も仏もあるものか」という言葉があるように神と仏をセットで考えているわけですね。ところが「神仏分離令」を出した明治政府の立場からすると、神と仏が習合しているような修験は困る。そこで修験を廃止したのです。もうひとつは権現とかあるいは菩薩とかあるいは牛頭とかそういう仏教をかわる名前では呼ばれている神社はすべて廃止して、神道一本にしようとするそういう政策がありました。ところが修験では神仏が習合してますから、それをやめさせると。そういうことが大きなポイントになりました。

これに対して修験がどう動いたかといいますと2つの流れがありました。1つは寺院になっ

ていくというもの。もう1つは神社になっていくというケースがあります。で、神社になったケースというのは例えば羽黒山の場合ですと出羽三山神社というのがありまして、羽黒と月山と湯殿山が一緒になって出羽三山神社になりました。そして当時、葬式寺だったお寺が仏教的なものを後に伝えると、そういう形になっている。完全に分離していくわけですね。そして権現号も廃止されたから神社になる。その時に、地方の大きな霊山の場合には神社になる場合が非常に多かった。ところが中央の吉野の場合ですと、仏寺として頑張って残った。頑張って残った大きな根拠というのは、今話しました修験道廃止令のなかで、修験は本寺の所轄のまま仏教の宗派に入ると、そういう指示がなされたわけですね。そういうことがあったものですから、さっきいった本山派の修験は聖護院を本寺として天台宗に包括されてくることになります。同じように真言系の修験の当山派は、これは三宝院が掌握したまま真言宗に入っていくわけですね。そして、仏寺として存続する。そういう形の2つの道のどちらかをとりました。

今一方で、各地で里修験・里山伏といわれた地域社会に定着していた修験には3つの動きがありまして、第1はその時に修験をやめて神社になっていく、これは結構あります。特に東北地方の場合ですとこうした神社に変わったケースが多くあります。

第2はこれと似たようなケースですけれども、地方の比較的大きな神社の場合には神社の神主の世襲を禁止する法令がでましたから、世襲できなくなったわけですね。そこで武士であるとか神事について知識を持っている人が神社に奉仕するようになってきました。けれども彼らが実際にお宮を管理する時には近世期を通してそ

の社を守ってきた修験に助けてもらわざるを得ないわけです。そういうことがあるものですから、かつての修験が俗別当としてそれを助けると、そういうケースがあります。ですからこれは先ほど申し上げましたもともと神社を守っていた俗別当が修験に展開したのと逆をいったわけですね。俗別当として神社に奉仕するという、こういうケースがあります。

第3のケースというのは、さっきいいました神仏分離令にのっとって寺院として存続したケースの場合です。寺院として存続したケースの例にはさきほど年行司の例としてあげました仙台の南の宗畔院というお寺は寺院として存続しております、そして今も蔵王山に修行にしています。そういう3つの分かれ道をとったということがいえると思います。

そういうわけで、修験が非常に厳しい神仏分離令にあったのは、さっきもいいましたように神仏を区別するっていう明治政府の政策に抵触したからです。その中で里修験は今話しました3つのいずれかの道をとったわけです。

司会：修験が廃止された経緯と、それに対する修験の側の対応という形でお話を伺いました。では、もう一方のコメンテーターの塚本先生にコメントをお願いいたします。

塚本：塚本信也と申します。先ほど、宮家先生が地名の読み方は難しいので、間違っていたら教えてくださいとおっしゃっておられました。地名のみならず、名前も例外ではありません。実は、今回、コメンテーターを引き受けた時点で、私は既に赤っ恥を搔いてしまっています。ミヤケヒトシ先生がいらっしゃると聞いたものの、無知蒙昧な私にはどなただか全く見当がつかない。数字の三と安宅の関の宅、サンタクのミヤケ、ヒトシはヒトシで、均等の均か等ぐら

いしか脳裏に浮かばなかったのです。うちのゆかないことを見て取った梅屋先生が詳しい説明をして下さり、漸く合点がいった。あの著名な先生ではないかと。二度びっくりです。しかも、数か月前に先生の御著書、『靈山と日本人』を読んでいたというのに。横着な性格と中国語教師という職業柄でしょうか、私は何につけ漢字を中国語読みしてすませる悪癖があります。中国語は原則として一字一音なので、楽なわけですね。“ゴンヂアジュン”が“ミヤケヒトシ”になるとは、まさか今日まで思いもよりませんでした。

再び表記についていえば、中国語の場合、なるほど一字一音が原則なのですが、仮借といたり通用といたり、とにかく文献にはいわゆる宛字が多い。通時的な要因、誤写の問題はともかく、先生もおっしゃった通り、発話者と筆記者とが別だからですね。日本語の場合は更に複雑で、例えば「山」という文字を音で「サン」なり「セン」なりと読む半面、訓で「ヤマ」と読むことも可能です。実際、「バンダイサン」、「シノブヤマ」から「イイデサン」、「オソレザン」といった湯桶読みまである。一体、「サン」を選ぶ、或いは「ヤマ」を選ぶという具合の意識的な使い分けはあるのでしょうか。

それから、磐梯山に表と裏の顔がある、蔵王山にも山形側の顔と宮城側の顔があると、おっしゃっておられました。山に対する裏と表という見立て、御指摘は大変興味深い。私なぞは、表というあり方、スタンスを自明のように考えていた気がしてなりません。勝手な思い込みですね。誰にとつての表であり裏なのか、その視点を含め、文献にはもう少し自覚的、意識的に対しなければならぬと、今更ながら反省させ

られました。

山でもう一つ。奥という言葉、形容も興味深く伺いました。先生の術語でいえば水平思考、これを説明する重要な語になりましようか。中国の文献だと、山を形容する最も普遍的な言葉は「奥」ではなく、おそらく「高」ではないかと思えます。「山海経」あたりに代表される如く、山は高くて届かぬ恐ろしい存在であり、だから人は誰も住まず、妖怪の類が棲息する。或いは水平的な距離が垂直的なそれに置換されている印象がなくもない。異域の存在が妖怪の如く表象されたりする例が典型でしょう。もっとも、六朝宋代以降、山水詩が勃興してくると、山に対して「高」ではなく「遠」という描写が現われます。山に、自然に届こうという意思の表明でしょうが、「奥」と「遠」とでは、明らかに含むところに差がある。やはり彼我で自然に対する把握、感性が異なるというべきなのでしょう。

さて、熊野系の本山派に寿松院があり、末院81を抱えている。他方、羽黒系も155あり、拠点の数量だけを眺めれば、羽黒系に軍配が上がるはずなのに、大勢としては本山派に属すること。数的優位は必ずしも勢力を担保しないという、当然とはいえ、ある意味で政治的な力学が働いていると理解しました。また、東光院が「道成寺」の安珍を開基とするというように勢力をもった修験はフィクションを通すほど強い影響力がある由。とすれば、当山派と本山派とが勢力争いをする過程で、伝承なり教説なりが変化を齎ることもあったわけでしょうか。

最後に、山伏を巡る問題について伺わせて下さい。勿論、中国の史料を読んでも、山伏そのものにはぶつかるはずもないのですが、強いて似た存在を挙げるならば、芻蕘、つまりキ

コリになろうかと考えています。例えば、『春秋左氏伝』や『墨子』などにおいて、芻蕘は山林藪沢と共存共栄の関係を結んでおり、『史記』に見える舜の伝説でも、そこはイニシエーションの場として設定されています。但し、中国の芻蕘は日本のキコリに比して、よほど獐猛な面もある。例えば、山に潜伏する彼らは時に王朝を転覆させんばかりの非常な大暴れをします。生業云々の問題ではなく、時の権力にまつろわない者たちに、こういうラベリングをしたふしがあり、実態としては、むしろ山賊かゲリラといった方が近い。先ほど、先生が修験を迫害する歴史もあったとおっしゃっておられたので、ふとそれが頭を過ぎりました。それは措き、キコリを始め、山の生活者は、如何に山の神との共存関係を維持していたのでしょうか。色々申しましたがどうか御教示いただければありがたく存じます。

宮家：あまりたくさん質問で整理しにくかったんですけど、順番に申し上げたいと思います。前に山を「せん」とよぶか「さん」とよぶか「やま」とよぶか、これにつきましては定説はございません。ですから、その時々読みやすい形で「さん」とよんだり「せん」とよんだり、或いは「やま」と読んだりしているという形じゃないかなと理解しております。ただし、山の中でもですね、非常に岩が累々とした山の場合ですと「岳（だけ）」という言葉を使いますですね。御岳みたけという形で表現した。そういう呼び方は見られます。

その次に、山に裏と表があるのかということですが、裏と表とか前と後ろとかいうのはあります。例えば、鳥海山はなだらかな表に対して裏のほうが非常に険しい形である種の間場になっていくと。そういう形でどちらかとい

うと裏のほうが険しくなっています。例えば、大峰山の山上ヶ岳というのがありますけれども、ここなんかの場合でも表行場と裏行場と2つあって、裏行場の場合には非常に険しい修行をいたしまして、裏行場をした上で本堂に後ろ側から入る「後うしろ繞まわ道みち」というのがありますから、裏っていうニュアンスのほうが非常に大きな意味を持つのではなからうかということを感じています。

それから、高いと水平的なものということにつきましても、日本にも、垂直的な考え方もありますけれども、多くの場合は日本人は水平的なかなたの方に霊地があると考えることが多いんじゃないかという気はいたします。お墓のことを奥津城といたり、里に対して奥山という。神社でも奥社という形になってきまして、奥ってというのは垂直的なものの形ではなくて水平で考える。例えば、戸隠なんかで見ますと、奥の院に行く道に「高天原」と書いた小さなのぼりが数多くたっている。山の奥が高いところで高天原、天上ですね、そういうようなニュアンスがありますので、日本人の場合には奥が上と同じような解釈になるんじゃないかなという気がします。

その次のご質問で、当山派と本山派の争いですね、この両派が厳しく争いあいますとお互い自分達の教義をそれにあわせてつくるようになってきます。本山派のほうは自分達が早くからやっていた熊野から入って行って吉野に抜けるのが順峰で正しいんだ、それに対して当山派は吉野から熊野へ、これは逆で逆峰さかみねなんだと。これに対抗する意味で、修験者がよくやります「サイトウゴマ」の漢字は、本山派の場合には木をとってくる採集の採と燈火の燈、護摩と書きます。それに対しまして、当山派の方は柴と

いう字を書いて燈火の燈と書いて柴燈護摩と読ませている。その理由としまして、本山派に対する当山派側の悪口は、本山派の連中は自分達(当山派)が柴燈護摩をした残り木を採集しているから採燈護摩という字をあてているんだと。そういう形で表現する。ですから、お互いに自分達がより正統なんだということを主張するような教義的な論争がありまして、『本山修験偽邪弁論』というお互いにいなしあうような本をつくっております。山伏の服装をみますと胸と背にいくつかの梵天がついた、結袈裟をつけますけれども、この梵天が本山派の場合ですと丸い大きなものを左右と背中につけますが、当山派の場合は金の甕かみのものをつけます。このように本・当がお互いが競うようになってきますと、教義的な説明のしかたが若干違ってくるという、ある意味で言葉遊びみたいなものですけどもそういう形のものがみられるわけです。

その次に今度は、山伏以前の山の神との関係はどうかという質問ですけども、さっき山の神の信仰が東北には非常に多くあるんだと申しましたけれども、山の神の信仰は当然のことながら山伏が入る以前からあります。で、その山の神というのはより多くの獲物を授けてくれる、或いはより立派な木を授けてくれる、そういう信仰なわけです。もう少し具体的なことを申し上げますと、獵師達は山に入るときは必ず山の入口にあります山の神を拜んだ上で山に入っていきます。そうしまして山に入っていきますと、山の神は女神ですが、その女神を喜ばせるために山の神の前で男性が男性のシンボルをあらわして輪になって踊ると、神が喜んでより豊かな恵みを与えてくれると、いわゆる豊稔をもたらしてくれる、そういうような信仰が山

にはありますけれども。

もう1つ、山の猟師達は山の中で獲物を殺した場合でも、自分達は山の神様からこの動物の肉はもらうけれども魂は残して帰るんだと、そういう信仰があります。日本では魂が宿っているのは心臓だとされていますから、心臓をそこにおいております。そうすれば山の神様がそれにまた肉をつけてくれるんだと。自分達はあくまでも山の神様から肉だけもらうんだが、魂は残していく。もっていかないんだと、そういう信仰があるわけですね。

同じような意味で木こりの場合でもですね、実際に山の神様の庇護のもと、仕事をします。非常に面白い話を1つ申し上げますと、奈良県の十津川村という日本で一番長い村が大峰山系の西側にあります。その木こりが毎日髭をそってきれいな顔をして山に入っていくんですね。で、奥さんが不思議に思って夫の後をつけていくんですね。そしたら、大きな絶壁のところにある木を主人が切っている。その後ろから非常にきれいな美女が抱えていたんです。それで奥さんが大きな声で「あなた！」って怒ったら、その女性がすうっと消えてしまった。そして帰ってきてから木こりが奥さんに、せっかく山の神様が自分を一生懸命助けてくれたのに、お前が大きな声を出したから逃げてしまって自分は怪我をしたんだ、って怒られた、そういう話があります。

そういう形のように山の女神が守ってくれる。先ほど猟師達が魂があるところを置いていくっていうことをいいましたが、木こりの場合にも必ず大きな木を切った時にはそこに必ず若い緑の木の枝を差ししていく。そうするとやがてそれが蘇って、大きな木になっていくんだと。それは山の女神がしてくれるんだと。そういう

ような信仰がありまして、山の女神が獲物を与えてくれるあるいは木を育ててくれるという信仰があります。

その次、それがどういった形で修験の影響を受けたかと申し上げますと、諏訪明神の神文というのがあります。この東北地方にも諏訪明神の信仰は結構ありますけれども、これは獲物を殺した後、人間は成仏することはできるんだけど動物は畜生なので成仏することはできないと。だけど、人間である自分達が動物の肉を食べてあげることによりましてあなたがたも成仏できるんだと、そういうまあ一種のごまかしのような唱えごとをしています。

山の女神が豊穡をもたらすような信仰っていうのはいろいろな形がございますけれども、女人禁制の問題も含めて1つ申し上げますと、なぜ女性が修験の山に入ることを禁じられたかということですが、いろいろな解釈がありますけれども私自身が考えておりますのはこれは実際には中世初期からと思います。それは鎌倉初期頃にでてきた『諸山縁起』という非常に面白い縁起があるんですけども、その縁起の中にこういうような話があるんですね。修験の開祖とされる役行者がいつも髭をそって山の奥に入って山にいるお母さんの山の神にあって帰ってくると。そういう形で山の神である女性を一生懸命拜んでくる、そういう信仰があるわけですね。それからもう1つは、山で修行する修行者は山の女神と一体になって山の神の魂をもらってくる、それが非常に大事なんだということがいわれております。そういうことがありますから、霊山の秘仏は多くの場合には聖天さん、男女抱き合っている姿の仏です。実際に私はそういう修行はしないですからそういう体験はないですけども、本当に修行した人たちからいわ

せますと山の中にはいっていくと観音様に抱か
れている気持ちになるんだと、そういうことを
いう人がありますけれども。

そういうことをすることによりまして、山の
女神と一体になるには世俗の女性を絶った上で
山に入って行って山の女神と一体になることが
大切なのだ、そして山からでてくるとその山の
女神から授かった豊穰力を里の人に授けるんだ
と。

私は若い時に、3日ばかり山に入って山伏と
修行して山から下りてきたことがあるんです。
そうしましたら登り口のかつての女人結界のと
ころで女の人が道にうつ伏せになっているんで
すね。で、どうしたらいいのかと先達に聞か
ましたら、またいでやれというんですね。杖をつ
いてまたぐとその女の人が子供に恵まれるんだ
と。ですから、山の女神の豊穰力を男性を通し
て女性に授けていく、そういうような信仰があ
るんですね。ですから、山の女人禁制のもとに
は世俗の女性を絶って山の女神と一体となる
と、そういう信仰が根底にあるんじゃないかな
という気がいたしますけれども。

そのような形で、さきほどいった山の神の信
仰というものが修験の中に盛り込まれていくわ
けですが、また山伏の採燈護摩は焼畑の火入れ
と良く似ているんだということという人もいま
すし、大文字の山焼きなどの火床の形も採燈護
摩の護摩壇と似ています。そういった意味で山
の神の信仰っていうものが修験の中にも引き継
がれているということがいえると思います。そ
ういうことでよろしいでしょうか？

司会：それでは、フロアのほうから宮家先生の
講演に関しましてご質問ございませんか。

客席：放送大学の華園と申します。先生のご本
を私、持っているんですが、その中にはたぶん

書いていると思うんですけども、大きく言え
ば山伏のなわばりといいましょうか支配権とい
いましょうかそれについてちょっと2、3お伺い
したいと思います。さきほどちょっと話があり
ました当山派、本山派、羽黒派、その間でなわ
ばり争いというものがあったのかどうか、それ
があった場合にそれはどのような形で終息した
のかということ。

それからもう1つは、日本の宗教というのは
多面的なので神社の信仰もあればお寺の信仰も
あるし、山伏の信仰もある。その中で機能をそ
れぞれとりあげられて、神社の場合には地域の
鎮守をすると、お寺の場合には葬式や追善供養、
それから山伏の場合には加持祈祷、こういうよ
うなお話でした。ご指摘なさったように修験の
場合にはかなり神社のほうもお寺のほうも関与
しているわけで、従って例えば修験の崇拜対象、
不動さんとか観音様という仏教に関する信仰対
象があるわけですね。そういう点で日本の宗教
はどのような形で住み分けてきているかどうか。
特に山伏・修験がどういう点で他と比べて特徴
があるのかということ。

それから、お互いに修験が縄張りを侵さない
というんでしょうかそういう約束・ルールがあ
るんじゃないかと思うんですけども、例えば
自分の縄張り以外のところの人が「その山伏は
大変験力が優れているから是非お願いしたい」
とってその境を越えて来たときにそれは断つ
たのかどうか、或いは地元の人に頼みなさいと
かいったのか、そういうようなルールがあった
のでしょうか。

宮家：非常に難しいご質問をいただいたん
ですけども、まずは本山派と当山派との争いと
いう形にもうひとつありまして、これはさっきも
いいましたように江戸幕府が本山派を抑えて当

山派に拮抗させようとするという、そういうやり方をとったわけです。江戸幕府は一般にそれぞれ権威を持つ宗教界を2つに分けてお互いに競わせるという形をとったわけですし、それがご存知のように京都の比叡山に対して東の東叡山であり、京都の知恩院に対して東京の増上寺、そういう形をとって本山派と当山派を競わせるわけですね。

もうひとつは、盛岡藩にしる仙台藩にしる、本山派を保護しようとするわけですが、それに対しまして、特に東北地方は羽黒派が非常に大きな勢力を持っておりましたから、羽黒派がいろんな形で抵抗する。とその、抵抗の方法として羽黒派側が使ったのは、東叡山を通して本山派が抵抗できないようにする。盛岡藩の場合ですと、岩手山にそれまで別当だった自光坊に羽黒派の大勝院が別当としてはいりこんでいく。仙台藩の場合ですと、家康を祀った青葉城の東照宮の支配権を羽黒派がもって抵抗する。そういった形で東叡山を通して本山派と拮抗する形をとっています。ただし、言葉の上では区別しておりまして、本山派の場合には霞場という言葉でなわばりを表して、当山派の場合には檀那場というところで区別すると。そういう形をとっています。

第2番目の御質問は、さっき私は地域の守護は神社であり、葬式は仏教であるお寺さんであり、加持祈祷は山伏であったということを申し上げましたけれども、一般的には人々が宗教に求めるものとしまして地域の安全・家の安全や豊穡が1つ。それから死んだら浄土に行けるよというの1つ。もうひとつは、病気治しとか身の上相談とかそういった3つの機能があって、たまたま多くの場合には、神職と僧侶と修験がその機能を分かち合っているわけですね。

れども、神道でも吉田神道の場合ですと加持祈祷をいたしますし、仏教の場合でも曹洞宗の場合だとかなり民間信仰的な救済もしますから、話をわかりやすくするために申し上げましたけれども、機能的な分化がそうなのであって全部が全部修験者が担当するとか修験者が加持祈祷を専売特許みたいなことをやるわけではない、ということをお訂正がてら申し上げておきたいと思えます。

その次、今度はなわばりを侵すということですが、これにつきましてはかなり厳しい懲罰がありまして、ある山伏の支配範囲に入るとその土地の人の祈祷をしたりした時は、袈裟を剥ぐっていう形で罰をうける。極端な場合ですとそれによりまして、その侵した山伏が殺されてしまうという。ただ、殺すという場合でも、修験の場合は再生を前提としています。ご承知のように能に『谷行』っていうのがありますけれども、そこでは山伏がタブーを侵した稚児を石子積の刑に処します。これは穴を掘りましてそこに山伏をいれて石をいれて殺してしまうということです。これを信仰的な意味で申し上げておきますと、石はいろんなものを生まれ甦らせるっていう信仰がありますし、石は成長するんだという信仰がありますから、悪人を懲罰したうえで善人として生まれ変わらせるという擬死再生の験の信仰が石子積の刑の根底にあります。やっぱりなわばりを侵すということはかなり厳しい罪でして、袈裟を剥がれてしまいます。

最後に2つばかり追加させていただきますと、私が佐渡島で調査した四日町という村がありました。これは曾我ひとみさんがいらした村なんですけれども、その村には、一代法華ということがありました。この村は全体は時宗の村なんですけれども、その村の人でも個人

的に日蓮宗を信仰することはその人一代だけは認めるという一代法華という制度がありまして、なるほどそういう抜け道があったんだなという気がいたしましたけれども、そういった形のものでございます。

もう1つ申し上げますと、なわばりを侵すというのは非常に大きな問題なんですけれども、婚姻関係の中でですね、やっぱり身近な間での婚姻って多いものですから羽黒派の家が当山派の家からお嫁さんもらったりすることもありました。かなりルーズとっては変ですけどもそういった形で山伏社会を存続させようとする試みはあったと思います。

司会：それでは、宮家先生、コメンテーターの先生方、そして会場の皆様、本日は誠にありがとうございました。